マスクで守る、ストリートチルドレンの明日

PROJECT FOR ZAMBIA

COVID-19 緊急支援事業 最終報告書

世界各地で猛威をふるう新型コロナウイルス。今、アフリカでの感染が急増しています。Dialogue for People が継続的に取材を行うザンビア共和国では、家庭内暴力や諍いなどから路上で暮らさざるをえないストリートチルドレンが、今まで以上に脆弱な立場に置かれています。政府によってマスクの着用が要請されていながらも、マーケットでの値段は高騰。子どもたちは手に入れることすらできません。飛沫感染以外にも、マスクをつけていないことによる偏見や、それによって暴力を振るわれるといったリスクに晒され続けています。

「子どもたちへの支援活動が展開できないだろうか」。ストリートチルドレンの支援活動を続ける現地 NGO「Footprints Foundation for Children in Zambia」（以下、Footprints）からの相談を受け、協働でプロジェクトを発足。クラウドファンディングにて多くの方々からの心温まるご支援を賜り、マスク配布、そしてマスクを清潔に保つための講習や、感染症対策を学ぶワークショップを実施しました。

高架下で暮らす子どもたちの様子を見て回る Footprints 代表のヴァスコ氏。彼自身、ストリートチルドレンとして過酷な少年期を過ごしており、そういった子どもたちが教育の機会や、温かな居場所を見つけられるように支援している。（2019 年／佐藤慧 撮影）

本報告書では、活動の様子と実績のご報告に加え、フォローアップ活動を継続する中で直面する新たな課題、現地からの声などをお届けします。

Dialogue for People

活動状況 - 1

当初、ルサカ市内にある 12 のゾーン全てにマスクを配る予定でしたが、ストリートチルドレンの正確な数は把握できておらず、実際に配布を始めてみると Footprints が想定していた数よりも子どもたちの数が多いことがわかり、最終的に配布できたのは 9 ゾーンに留まりました。

数値実績（期間：2020/ 6 / 3 ~15）

配布回数
19 回

マスク配布数
1,200 枚

※うち 200 枚は現地で寄贈され、フォローアップに活用した。

ワークショップ開催数
20 回

ワークショップ参加人数
914 人

【Footprints 事業担当メンバー】

セヴェリノ・ヴァスコ（代表）
ジャフェット・ムビタ（事務長、アウトリーチ担当）
モーゼス・ジャンボ(アウトリーチ担当)
パスカル・テンボ（アウトリーチ担当）
アグネス・ピリ（アウトリーチ担当）

実施場所と各所での活動回数

▼ 活動地域マップ

>> 拡大してご覧になりたい場合はこちらから

※() 内は配布／ WS 開催回数

	日付	活動場所	マスク配布数	ワークショップ参加者数
A	6/3	ルサカ市中央郵便局近辺 -1	55（1）	54（1）
B	6/3	ルサカ市中央郵便局近辺 -2	51（1）	45（1）
C	6/4	レヴィ・ショッピングモール近辺	176（3）	162（4）
D	6/9	ニパ・カンファレンスセンター近辺	106（2）	100（2）
E	6/9	セブンスデー・アドベンチスト教会近辺	100（2）	92（2）
F	6/10	ハングリーライオン近辺［ファストフード店］	204（4）	203（4）
G	6/10	ニャング地区 TOTAL ガソリンスタンド近辺	152（3）	151（3）
H	6/11	マンダヒル・ショッピングモール近辺	102（2）	77（2）
I	6/11	ノースミード地区近辺	54（1）	30（1）
合　計			1,000(19)	914（20）

活動状況 - 2

子どもたちの様子

新型コロナウイルスに関する知識がほとんどない子がいたり、知っていても、自分の免疫力を過信する子どもたちもいましたが、Footprints スタッフの話を丁寧に聞いて協力してくれました。
教わった感染症対策をすぐに実施する子どもたちもいて、ワークショップの効果が見られました。中にはもっと念入りに対策したいと、石鹸や２枚目のマスクを求める子もいました。

路上で暮らしている子どもたちの中には、朝の５時から夜の８時まで食料を探す子どももいます。政府の方針で、子どもたちがいつまでも路上生活を続けることのないよう、ストリートチルドレンに食料を配布することは好ましくないとされているため、活動の最中に出会う空腹の子どもたちに食べものを配布することはできませんでした。

予備のマスクがもっと欲しくて、他のマスク配布場所までやって来る子どもたちもいました。送られてきたメッセージビデオの中では、子どもたちがマスクを装着しながら、感謝の言葉を口にしています。

マスクの装着方法をスタッフが丁寧に教える様子。
（撮影：Footprints スタッフ）

手指消毒やソーシャルディスタンスの確保などについて、実演しながらのワークショップ。（撮影：Footprints スタッフ）

MESSAGE FROM ZAMBIA

Footprints 代表　セヴェリノ・ヴァスコ氏

Footprints 代表のヴァスコです。新型コロナの感染拡大に対し、ストリートチルドレンを支援する機会を与えてくださった Dialogue for People に感謝をしています。

おかげさまで、体温計やマスクを購入することができました。子どもたちの健康を守れるのはみなさまの支援があってこそです。本当にありがとうございました。

活動の安全性を確保するため、急遽手配した検温計。活動前のスタッフや参加する子どもたちの熱を測るのに活用している。
（撮影：Footprints スタッフ）

活動状況 – 3

マスクの制作と地元からの関心・支援

子どもたちに配布するマスクは、パートナーを亡くされた女性たちが運営する「CAROLINE DESIGNS」の就業支援プログラムを受講した方々が作成した、ザンビアの伝統的な布「チテンゲ」で作られた、とてもカラフルなデザイン。

配布の様子を目にした地域の人々も、感染拡大を予防できることを嬉しく思っているそうで、Footprints がマスクを配布する様子をみて、匿名でマスクを 200 枚寄付してくれた地元の方もいました。

活動の様子はテレビにも取り上げられ、それを観た「青少年スポーツ・育成省」の理事は、これからも活動を続けて欲しいと述べ、Footprints の活動や、ストリートチルドレンの置かれている状況を省内で共有してくれたとのこと。
この事業をきっかけに、ストリートチルドレンに対する偏見が減り、関心が広がることを心から願うばかりです。

求職中の方々に、職業訓練を通じた支援を行う CAROLINE DESIGNS。指導役はパートナーを無くされた女性の方々が務める。（提供：CAROLINE DESIGNS）

伝統布「チテンゲ」はとにかくカラフル！日常的には、女性が腰に巻き使ったり、ドレスやスーツなどの布になったりする。お洒落なザンビアの人たちらしく、模様やカラーにも流行が。（撮影：Footprints スタッフ）

浮かび上がった新たな課題

新しい習慣を身につけるのは簡単なことではありません。Footprints は子どもたちが正しくマスクを装着できるよう、フォローアップ活動の中でも繰り返し強調し伝えています。

しかし、マスクは一人一枚しかないことに加え、そのマスクを洗うための石鹸を手に入れることも難しく、きちんとした衛生状態を保つことができていません。衣服からウイルスが感染することもあるので、洗剤の配布の必要性も高まっており、プロジェクトを継続するための資金調達が大きな課題となっています。
改めて、基本的な公衆衛生の欠如が子どもたちに与える影響の大きさが顕わになりました。

FOR MORE SUPPORT...

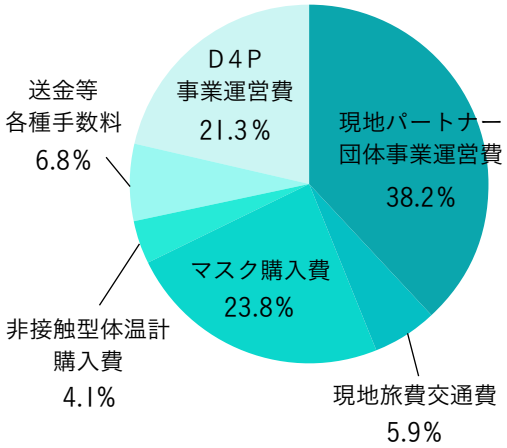
Footprints の活動を直接支援をしたい方は
下記ページをご参照ください。

https://www.footprints.org.uk/（English）

会計報告

クラウドファンディングにてご支援いただいた本プロジェクト事業費の会計報告は以下の通りです。

現地パートナー団体 事業運営費	¥143,521	※Footprints の事業運営費 （フォローアップ活動を含む）
現地旅費交通費	¥22,032	※現地での活動における ガソリン代など
マスク購入費	¥89,412	※マスクの制作および購入費 （1,000 枚分）
非接触型体温計購入費	¥15,280	※現地での活動で必要となった 非接触型体温計の購入費
送金等各種手数料	¥25,555	※本事業における送金及び 寄付金の決済代行手数料
D4P 事業運営費	¥80,000	※本事業における D4P 事務局運営費
合計	**¥375,800**	



おわりに／

"Together We Can（一緒ならできる）" を合言葉に

Dialogue for People 代表理事　佐藤 慧

みなさまから頂いたご寄付を基に、無事当初の予定通りマスクの配布、ワークショップの実施を終えることができました。プロジェクト発足当時は、ザンビア国内での新型コロナウイルス感染者の数は 1,000 人に満たない数でしたが、その後微増を続け、7 月に入ってからは一日で数百人が確認されるなど、急激な感染拡大が確認されています。検査体制も十分でない中でのこの数字は、その裏にさらに多くの感染者がいることが予想されます。

今回の支援対象であるストリートチルドレンたちは、コロナ禍以前から地域の厄介者として、冷たい視線を投げかけられてきました。感染拡大につれ、そうした子どもたちがウイルスの感染源となるのではないかという偏見にも晒されるようになりました。しかし、今回のプロジェクトの様子が、政府省庁に奨励されたり、地元テレビで放送されたりすることで、地域の人々への理解も進み、政治家の中にもストリートチルドレンの問題は社会全体で向き合わなければならないという発言が見られるようになりました。

現在、日本でも感染拡大傾向が見られ、地球規模でのパンデミックは今後も収束の見通しが立っていません。しかし今回のプロジェクトのように、助け合えるところからみなで手を携えていくことで、少しずつでも社会の脆弱性を克服していけるのではないかと思います。現地パートナー団体、Footprints のスタッフはいつも、「Together We Can（一緒ならできる）」を合言葉に仕事を始めます。日本から遠く離れたアフリカ大陸のザンビアに暮らす人々を、このプロジェクトを通じて少しでも身近に感じて頂けたようでしたら、これほど嬉しいことはありません。国や人種､宗教や性別を超えた、温かな社会を築くために、今後ともみなさまと共に歩んで行けましたら幸いです。